

時間後撮影) 画像は劣る。血中クリアランスの測定結果からも同様のことがたしかめられた。現在のところでは骨スキャンには ^{99m}Tc -Diphosphonate, -Pyrophosphate がすぐれていると考えられるが、臨床応用については尚、研究の余地がある。

8. 甲状腺機能亢進症性全身脱毛症

永田 豊彦 広田 嘉久
(熊大・放)

我々は、全身脱毛症を伴った甲状腺機能亢進症を ^{131}I 投与により、両者を治療し得た、興味ある1症例を経験した。

患者は、41才の男性、甲状腺機能亢進から来ると思われる自覚症状と共に脱毛を認め、当科(熊大放)に受診、入院した。RI検査により甲状腺機能亢進症と診断し ^{131}I -7 mci を投与、経過観察を続けた。 ^{131}I 投与後6ヶ月目で各種自覚症状の軽度改善と共に、かすかながら全身の発毛を認め、3年目に自覚症状、RI検査値の著しい改善に伴い、脱毛症も著しい改善を認めた。

本症例は、RI検査、並びにRI治療により、著しい改善を見た脱毛症の1例ということで興味ある1症例と考え、本会に報告した。

9. 胃シンチグラムについて(続報)

・金子 輝夫 松本 政典 片山 健志
(熊大・放)

従来の並行型コリメータのかわりに新たに試作した Di/con コリメータをコンバージングコリメータとして用いて得たイメージについて検討した。すなわち、予め ^{99m}Tc -pertechnetate 約 $30\mu\text{Ci}$ 静注し、胃の目的の部分を大略ガムマ・カメラの視野の中央に来るよう照準した。ついで ^{99m}Tc -pertechnetate 3 mCi を静注し、経時的に 16秒間のイメージを磁気テープに記録し、後に 35mm フ

ィルムに撮影し検討した。このコリメータは並行型コリメータ(4000holes)に比し、高感度で拡大像が得られ、病変部の観察に適当であると思われた。胃悪性腫瘍の数例について症例を供覧した。

10. ^{198}Au コロイドによる胃のリンパ動態について

西山 邦彦 古川 保音 尾関巳一郎
(久大・放)

我々は ^{198}Au コロイドを胃内壁に、胃ファイバースコープを使用して注入し、胃よりのリンパ流を24時間、48時間後にシンチグラフィーで追求した。その結果は(A)群、連続的リンパ流像を示すもの、(B)群、不連続を示すもの、(C)群、限局性に残留するものの三群に分けることが出来た。(A)群は正常なリンパの流れを示すもので、良性疾患及び数例の早期癌が含まれた。(B)群は流路を連続的に追跡出来ないもので若干の進行癌及び良性疾患にもみられる。(C)群は進行癌に多く見られるが、良性疾患にも数例みられる。良性疾患では注入手技が関連していることも考えられる。今後症例を重ねて、検討を加えてゆきたい。

11. 肝の Processed image (予報)

矢野 潔 古賀 尚充
(福岡県立柳川病院・放)

我々は肝の processed image について検討しているが、それに先立って肝の集積率を検討した。之は 20秒の Time frame を作り、肝の Highest activity のある部と思われる部に ROI を設定し ROI Curve を書き $T_{1/2}$ を求めてそれより肝蓄積係数 (KL) を求めた。

^{99m}p hyfale の場合は正常では $T_{1/2}$ 3 分 KL = 0.22 であるが、肝硬変症の場合は $T_{1/2}$ が 5 分となり KL は 0.13 と変化した。 $T_{1/2}$ は肝硬変の場

合では diagnostic reliability がみとめられた。

肝癌及びホヂキン氏病の場合に於ては肝蓄積率は大となり、RoI curve がプラトーになる時間が早くなる傾向にある。

肝の蓄積率は肝細胞の量と activity とによって左右される様である。

12. 当院における映像処理について

藤井 恭一

(九州厚生年金病院・放)

九州厚生年金病院放射線科に導入された核医学装置は、東芝製 γ カメラ 201型に、Tosbac 40Cを中心とし、コアメモリー 64KBite で、MT 1台、Disk 1台、大型ディスプレーと、ハードコピー及びカラー表示を可能とする装置である。一般的に、データ処理装置は動態機能測定に意義を有していると考えられて来たが、私共の装置、特にハードコピー、カラー表示装置の活用により、静的な映像が、その質的な検討が可能となる事が分った。

又、動的な計測値の変化の解析だけでなく、その動的な映像の変化を、その相だけの映像としてとり出す事も可能となり、例えは、心臓の左右房室及び大動脈などを個々に描室する事が可能となり、又、各疾患病変部分を的確なカラー表示で、映像の質的処理が可能である事を報告した。

13. 胆シンチによる先天性胆道閉鎖の検査

仲山 親 渡辺 克司 川平建次郎

鴨井 逸馬 中田 肇 松浦 啓一

(九大・放)

高島 幸男

(九大・小児)

新生児、乳幼児における黄疸の鑑別診断に ^{131}I -RB または ^{131}I -BSP を用いた。対象は先天性胆道閉鎖14例、肝炎13例、その他9例の36例で40回

の検査を行った、RI 静注後、経時的シンチグラフィーにて、先天性胆道閉鎖の場合、14例15回の検査で、RI が全く腸管に排泄されなかったものは13回で、肝炎の場合は13例15回の検査で、排泄過延または正常に排泄されたものは14回であった。RI の尿中、便中排泄率を静注72時間にわたり計測したが、先天性胆道閉鎖の便中排泄は10%以下に多く、肝炎の場合は10%以上に多かったが明瞭には区別できなかった。

14. ^{131}I -Adsterol と ^{131}I -19-iodocholesterol による犬の副腎シンチグラフィーの検討

鴨井 逸馬 渡辺 克司 川平建次郎

仲山 親 古賀 一誠 川波 喬

松浦 啓一

(九大・放)

副腎シンチグラフィー用放射性医薬品として、 ^{131}I -Adsterol および ^{131}I -19-iodocholesterol の両者について、犬を用いて副腎シンチグラフィーを行う事および、臓器分布を計測することにより、副腎集積能を検討する。

犬2頭を用い、 ^{131}I -Adsterol および ^{131}I -iodocholesterol 100 $\mu\text{Ci}/\text{kg}$ を静脈内投与し、投与8日目に副腎シンチグラフィーを行い、得られたシンチグラムについて副腎集積能を検討した。さらにシンチグラフィー終了後、直ちに屠殺し、副腎および主要臓器の一部を採取し、重量を計測した後、各臓器片の放射能をウエル型シンチレーションカウンターにて計測し、各臓器のグラム当りのカウント数を求め、各臓器比を両者について検討した。

〔結果〕 ^{131}I -Adsterol および ^{131}I -19-iodocholesterol の両者共に副腎の集積を認めた。両者間に著明な差を認めなかった。

臓器分布による検討では、副腎および甲状腺に両者共に高い集積が認められたが、両者間に差は認めなかった。